

原著論文

青年・成人用感覚チェックリストの開発
—基準関連妥当性および再検査信頼性の検討—

立山清美*¹, 中岡和代*¹, 石井良和*², 伊藤祐子*²

要旨:本研究の目的は、「青年・成人用感覚チェックリスト」の1) 基準関連妥当性, 2) 再検査信頼性を検討することである。1) 対象は, 定型発達者108名(男性53名, 女性55名, 平均年齢35.7 ± 10.9歳)であった。外的基準には日本版青年・成人感覚プロフィール(以下, AASP-J)を用い, Spearmanの順位相関係数を算出した。その結果, 本チェックリストの各因子とAASP-Jの該当する象限には, 14因子中11因子に中等度の相関, 3因子に弱い相関が認められた。2) 対象者は, 定型発達者55名(男性35名, 女性20名, 平均年齢34.6 ± 10.1歳)で, 検査-再検査の期間は2週間とした。Spearmanの順位相関係数を用いて検討した結果, 検査-再検査間の相関は, 各感覚の合計スコア $r = .757 \sim .855$, 下位因子の15因子中11因子が $r = .75$ 以上, 4因子が $.65$ 以上であった。よって, 本チェックリストの基準関連妥当性, 再検査信頼性が確認された。

Key Words: 感覚調整障害, 基準関連妥当性, 再検査信頼性, 青年・成人, 尺度開発

はじめに

発達障がい (Developmental Disability 以下, DD) 児・者には, 感覚処理に偏りのある人が多い。DDの中でも自閉スペクト

ラム症 (Autism Spectrum Disorder 以下, ASD) の人では, 90%に何らかの感覚処理の問題を抱えているとの報告がある¹⁾。当事者の藤家は, 「スカートを履くと脚の輪郭が見えないので怖い」など, 視覚的に確認できない身体部位がわかりにくいといった固有受容感覚等の感じ取りにくさがあり, その一方で, 「消毒用塩素のにおいがダメで泣き叫び, プールに入れない」といった嗅覚過敏, その他にも聴覚過敏, 味覚過敏などの例がいくつも存在し, 感覚処理に偏りがあると報告している²⁾。このような感覚処理に偏りがあり, 行動や情動などの適応反応が妨げられる状態は感覚調整障害³⁾と呼ばれている。

Development of the Sensory Modulation Questionnaire for Adolescents/Adults: A study of criterion-related validity and test-retest reliability

- * 1 大阪府立大学大学院総合リハビリテーション学研究科
Graduate School of Comprehensive Rehabilitation, Osaka Prefecture University
- * 2 首都大学東京大学院人間健康科学研究科作業療法科学域
Department of Occupational Therapy, Graduate School of Human Health Sciences, Tokyo Metropolitan University

我が国では、感覚調整障害の評価には、感覚発達チェックリスト改訂版⁴⁾ (Japanese Sensory Inventory Revised, 以下 JSI-R) が広く用いられてきた。JSI-R は、太田らによって4～6歳の定型発達の幼児データをもとに標準化されたものである。7歳以上の子どもや青年・成人を対象に標準化されたものがなく、臨床の場では学齢期以降のDD児・者にもJSI-Rが使用されてきた。そのような状況の中、「主治医にうまく伝えられず、理解してもらいにくいので、大人用のチェックリストがほしい」との当事者からの要望もあり、筆者は、青年・成人を対象とした自己評定式の感覚チェックリストの作成に取り組んできた。

最近になって、日本版青年・成人感覚プロフィール（以下、AASP-J）が発売された（2015）。これは、米国で開発された60項目からなる自己評定式の行動質問紙「Adolescent /Adult Sensory Profile（以下、AASP）」を日本においても標準化⁵⁾されたものである。AASPは、感覚調整障害を神経学的閾値（高低）の連続性と行動反応・自己調節（能動的・受動的）の連続性という2軸からなる4領域でとらえたDunnのモデルに沿って開発され、国際論文にも用いることができる強みをもつ。しかし、自己評定式のAASP-J（11歳～82歳）では、「低登録（高閾値・受動的行動）」、「感覚探求（高閾値・能動的行動）」、「感覚過敏（低閾値・受動的行動）」、「感覚回避（低閾値・能動的行動）」の4つの象限スコアが得られるのみで、感覚処理カテゴリー別（感覚系ごと）のスコアや他者評定式の日本版感覚プロフィール⁶⁾（以下、SP-J）のような因子別のスコアが算出されない。人の感覚処理は、聴覚は過敏であるが、固有受容感覚は低登録など、感覚系によって特徴が異なることがあり、感覚調整障害の

支援には感覚系ごとにスコア化される必要があると思われる。さらに、AASP-Jの4象限での採点では、「低登録」、「感覚過敏」という、相反する象限でどちらも高値を示すこともあり、やはり、どの感覚が「低登録」で、どの感覚が「過敏」なのかという感覚系ごとの特性の把握が欠かせない。

一方、JSI-Rでは、どの感覚系に感覚調整障害が示唆されるかを判定できるが、低反応を示すのか、過敏な反応を示すのかは、その詳細なスコア化がされず、精通した採点者が回答の傾向を読み取る必要があった。そこで、筆者らは、日本で広く使われてきたJSI-Rを青年・成人用に改定し、かつ感覚調整障害の詳細を評価できる「青年・成人用感覚チェックリスト」の開発を進めてきた。

開発にあたり、まず、専門家会議にて「青年・成人用感覚チェックリスト（試案版）」を作成した。その方法は、JSI-Rの中から①青年・成人に該当しない項目の削除・変更（予備調査結果⁷⁾を判断の資料とした）、②他者評定式から自己評定式の質問への修正、③Miller LJの感覚統合障害の分類⁸⁾を参考に、質問項目を「低反応」、「感覚探求」、「過敏・回避（過反応）」および「感覚識別（ある感覚と別の感覚を区別すること）」にカテゴリー分類し、カテゴリー内の項目数が少ない場合は質問項目を追加した。

このように作成した「青年・成人用感覚チェックリスト（試案版：91項目）」を用いて調査を行い、17歳～59歳の定型発達者681名分のデータを因子分析し、構成概念妥当性、内的整合性を確認した⁹⁾。因子分析後の「青年・成人用感覚チェックリスト」は、前庭感覚2因子9項目、触覚3因子11項目、固有受容感覚2因子8項目、嗅覚・味覚3因子8項目、合計55項目から構成される（表1）。さらに、ASD群58名と年齢性別をマッチン

表1 青年・成人用感覚チェックリストの質問項目

前庭感覚

第1因子 過敏

- 1 遊園地にあるようなスピード・揺れ・回転する乗り物が怖い。
- 2 遊園地にあるようなスピード・揺れ・回転する乗り物が好きだ。(逆転項目)
- 3 高い所が怖い。(階段、歩道橋、傾斜等)
- 4 エレベーターやエスカレータの動く感じが苦手だ。
- 5 足元の不安定な場所が怖い。

第2因子 前庭感覚への探求とバランス

- 6 座っている時に、頭や体を揺らしたり、椅子を揺らす癖がある。
- 7 絶えず動いていたいほうである。
- 8 作業や課題に集中していると姿勢がくずれやすい。
- 9 他の人よりも物につまずいたり、簡単にバランスを崩しやすい。

固有受容感覚

第1因子 探求

- 10 狭い場所、積み重ねられた布団やマットの間など体に圧がかかる感覚が好きである。
- 11 ロッククライミング、アスレチックなど体をしっかり使う活動が好きだ。
- 12 少し重い布団の方が好きだ。
- 13 固い食物や弾力のある食物が好きだ。(煎餅、グミキャンディー、ガム等)
- 14 重いものを持ちあげたり、運んだりすることが好きだ。
- 15 椅子に座っているときにお尻や太ももの下に手を入れて挟むと落ち着く。

第2因子 力の調整

- 16 力まかせにみがいて歯ブラシの毛先がすぐに使えなくなる。
- 17 力を入れすぎて物をこわしてしまうことがある。

触覚

第1因子 過敏

- 18 特定の感触の物(タオル・毛布・ムース・糊など)が嫌だ。
- 19 特定の触感の食物を食べない。(ベタベタ、パサパサ等)
- 20 体に触られることに非常に敏感である。
- 21 触られたあとを自分で引っかいたり、なでたりする。
- 22 手や足が少しでも汚れることが嫌だ。
- 23 特定の感触のする衣類、靴下、手袋、マフラー、帽子を身につけるのを避ける。

第2因子 低反応

- 24 自分の顔や手が汚れていることに気づきにくい。
- 25 床に落ちている物(ご飯粒やシールなど)を踏んでも気づかないことがある。
- 26 暑さや寒さを感じにくい方である。

第3因子 探求

- 27 物や人、動物に触るのが好きで、つつい触り続けてしまう。
- 28 ついつい手でなんでも触ってしまう。

聴覚

第1因子 低反応・探求

- 29 テレビの音などを大きな音で聞く傾向がある。
 - 30 自分の名前を呼ばれても気づかないことがある。
 - 31 大きな声で話す傾向がある。
 - 32 音が聞こえる方向がわからない。または、混乱しやすい。
 - 33 音や単語の聞き取りの間違いをしやすい。
-

第2因子 識別

- 34 周りがうるさいと、注意散漫になりやすい。
- 35 冷蔵庫、換気扇、掃除機、ラジオなどの音がある場所で、仕事や勉強をすることが難しい。
- 36 にぎやかな場所、騒々しい場所では、話が聞き取りにくい。

第3因子 過敏

- 37 音が聞こえないようにすることがある(例:ドアを閉める、耳を覆う、耳栓をする)
- 38 他の人がテレビを見ていると、その部屋を出るか、または音量を下げるように頼む。
- 39 人混みや、うるさい場所が嫌である。

視覚

第1因子 識別

- 40 初めての場所では、道や建物や部屋の標示を見落としやすい。
- 41 道によく迷ったり、人の顔の区別ができないことがある。
- 42 探し物をうまく見つけられない。

第2因子 過敏

- 43 周りの動きが激しいと、疲れやすい。(例:ショッピングセンター、祭り、駅など混雑しているところ)
- 44 いろいろな物が見えると、気が散りやすくなる。
- 45 カメラのフラッシュなど強い光がとても嫌である。
- 46 人の目を見ることが苦手である。
- 47 日中部屋にいるときに薄暗くしている。

味覚・嗅覚

第1因子 味覚への低反応・探求

- 48 料理の味が薄かったり、物足りなく感じたりする。
- 49 出された料理に塩、こしょう、しょうゆなどの調味料をかけて味をこくする。

第2因子 味覚過敏

- 50 偏食がある。
- 51 なじみのある味の食べ物しか食べない。
- 52 特に嫌いな種類の味がある。
- 53 味が混じり合うことが嫌である。

第3因子 嗅覚過敏

- 54 においに対して非常に敏感で不快な気分になることがある。
 - 55 食べ物のにおいが嫌で食事が進まないことがある。
-

グした定型発達群を比較し、本チェックリストの判別的妥当性についても確認した⁹⁾。しかし、基準関連妥当性および再検査信頼性の検討については、今後の課題となっていた。そこで、本研究は、定型発達者を対象に「青年・成人用感覚チェックリスト」の基準関連妥当性および再検査信頼性を検討することを目的とする。

方法

1. 調査対象

調査協力者7名(作業療法士、障害者福祉センターの職員、専門学校教員)を通じて、職場、研修会、居住地域などでの定型発達者へのデータ収集を依頼した。回収は、調査協力者へ手渡すか、筆頭筆者への郵送とした。

2. 調査内容

1) 基本情報

基本情報として年齢、性別、在住の都道府県を尋ねた。また、発達障害の診断の有無、自閉症スペクトラム指数10項目短縮版（以下、AQ-J-10）で、カットオフ値以下であることを確認した。

2) 「青年・成人用感覚チェックリスト」

構成概念妥当性の検討以前に、並行して本調査を実施した。そのため調査には「青年・成人用感覚チェックリスト（試案版）」91項目を用い、分析の際に「青年・成人用感覚チェックリスト（表1）」に該当する55項目を抽出して用いた。

各質問項目には、4件法で回答し、「当てはまる（4点）」、「やや当てはまる（3点）」、「やや当てはまらない（2点）」、「当てはまらない（1点）」である。

再検査は、先行研究に習い¹⁰⁾1回目の青年・成人用感覚チェックリスト記入から2週間後に実施した。

3) AASP-J

外的基準には、日本においても標準化されており、感覚特性を評価するAASP-Jを用いた。AASP-Jの質問項目は、味覚・嗅覚、運動、視覚、触覚、活動レベル、聴覚の6つのセクションからなり、合計60項目である。各項目に「1.ほとんどない（5%）」から「5.ほとんどいつも（95%）」の5段階で回答し、数値が高いほど、反応の頻度が高いことを意味する。

3. 分析方法

1) 基準関連妥当性

AASP-Jのスコアリングは、感覚情報処理カテゴリーおよび全体のスコアリングはされず、「低登録」、「感覚探求」、「感覚過敏」、「感覚回避」の各象限スコアのみが算出される。

一方、本チェックリストは、感覚系ごとに因子分析を行っており、各感覚の合計スコアおよび因子別のスコアを算出できるが、全体の合計スコアを算出することは適切でない。そこで、本チェックリストの各因子スコアとAASP-Jの象限スコアとのSpearmanの順位相関係数を求めた。また、分析を進めると該当する象限以外にも相関が認められたため、AASP-Jの象限間の相関についても算出した。

なお、本チェックリストは、Miller LJの感覚統合障害の分類⁸⁾を参考に作成しており、各因子と関連すると考えられるAASP-Jの象限（以下、該当する象限）は次のようである。本因子の「過敏」は「感覚過敏」、「感覚回避」の象限に、「探求」は「感覚探求」、「低反応」が「低登録」に該当すると考えられる。

2) 再検査信頼性

再検査信頼性の検討には、1回目と再検査（2週間後に実施した青年・成人感覚チェックリスト）の各感覚の合計スコアおよび下位因子のスコアについて、Spearmanの順位相関係数を求めた。

倫理的配慮

本研究に際し、大阪府立大学総合リハビリテーション学研究所研究倫理審査委員会の承認を得た（倫理審査番号2015-218）。研究協力依頼書にて、研究の目的、方法、倫理的配慮、研究への協力は自由であり辞退による不利益はないことを説明した。

結 果

1. 回答者

本チェックリストと合わせてAASP-Jを145名に配布し、116名の回答（回収率80.0%）を得た。そのうち、発達障害に該当する診断があると回答した2名、AQ-J-10の

カットオフ値（7点）以上の3名，記入漏れのある3名を除く，108名分を有効回答とした。有効回答者の性別は，男性53名，女性55名，年齢 35.7 ± 10.9 歳（範囲17歳～59歳）であった。

本チェックリスト再検査を80名に依頼し，61名から回答（回収率76.2%）を得た。AQ-J-10のカットオフ値以上の3名，記入漏れのある3名を除く，55名分を分析対象と

した。回答者の年齢は， 34.6 ± 10.1 歳（範囲17歳～59歳），男性35名，女性20名であった。

2. 基準関連妥当性

本チェックリストの各因子とAASP-Jの象限別スコアとの相関分析の結果を表2に示した。各因子と該当する象限には，すべて相関を認めた。該当象限のある14因子のうち，

表2 青年・成人用感覚チェックリストと日本版・成人感覚プロフィールとの相関 (N=108)

青年・成人用感覚チェックリスト		AASP-J							
感覚	因子	該当する象限		象限との相関係数					
		低登録	感覚探求	感覚過敏	感覚回避	低登録	感覚探求	感覚過敏	感覚回避
前庭感覚	過敏			○	○	.249**	-.035	.474**	.445**
	探求とバランス	○	○			.683**	.341**	.578**	.455**
固有感覚	探求	○	○			.406**	.388**	.337**	.232*
	力の調整					.279**	.287**	.316**	.364**
触覚	過敏			○	○	.372**	.364**	.531**	.489**
	低反応	○				.576**	.390**	.371**	.321**
	探求		○			.375**	.383**	.348**	.199*
聴覚	低反応・探求	○	○			.640**	.492**	.547**	.486**
	識別 [#]			○		.487**	.283**	.576**	.629**
	過敏			○	○	.243*	.214*	.507**	.602**
視覚	識別 [#] [≡]	○				.609**	.377**	.482**	.444**
	過敏			○	○	.506**	.421**	.636**	.648**
味覚・嗅覚	味覚への低反応・探求	○	○			.319**	.379**	.130	.107
	味覚過敏			○	○	.160	.301**	.230*	.164
	嗅覚過敏			○		.185	.346**	.407**	.267**

* p<.05

** p<.01

□ 4象限中における相関係数の最大値

聴覚の識別は，「周りうるさいと注意散漫になりやすい」など，AASP-Jでは「感覚過敏」に近いが，選択的に注意を向けて処理することを含むものである。

視覚の識別は，「探し物がうまく見つけられない」などの質問項目を含み，AASP-Jでは「低登録」に近いが，図と地の判別などの要素を含むものである。

中等度の相関 11 因子, 弱い相関 3 因子であった。相関係数の 4 象限中の最大値 ($r = .379 \sim .683$) は, 14 因子中 13 因子において, 該当象限 (表中の○印) に含まれていた。味覚過敏のみ, 該当する感覚過敏 ($r = .230$) よりも感覚探求 ($r = .301$) の方が若干高い値であった。

AASP-J の各象限間の相関を確認した。すべての象限間に相関が認められた。特に, 感覚過敏と感覚回避は .800 と高い相関を示した。

3. 再検査信頼性

各感覚の合計スコアの検査-再検査間の相関は, $r = .757 \sim .855$ であった。下位因子については, 15 因子中 11 因子が, $r = .75$ 以上の相関を示した。「触覚低反応」, 「触覚探求」, 「味覚過敏」, 「嗅覚過敏」の 4 因子は, $r = .658 \sim .681$ であった。

考 察

本研究は, 定型発達者を対象に「青年・成人用感覚チェックリスト」の基準関連妥当性および再検査信頼性の検討を目的とした。

基準関連妥当性の検討には, 日本においても標準化されている AASP-J を外的基準として用いた。本チェックリストの各因子と AASP-J の該当象限に相関 (14 因子中 11 因子に中等度, 3 因子に弱い相関) が認められた。各因子に該当する象限以外にも相関を認めたが, 多くの因子において, 該当象限の相関が他の象限よりも高く, 本チェックリストの併存的妥当性 (同一の構成概念を測定する変数間で高い相関) を示唆するものであった。各因子は, 該当する象限以外にも相関が見られた。これは, AASP-J の象限間が相関 ($r = .305 \sim .800$) しているためと考えられる。Dunn の感覚調整のモデル (4 象限) は, 神

経学的閾値の高低と行動反応の強弱 (感覚に対する自己行動調整が受動的・能動的) の 2 軸で分類されている⁵⁾。例えば, 「低登録 (高閾値・受動的行動)」と「感覚探求 (高閾値・能動的行動)」は高閾値で感じ取りにくい点で共通しており, 「感覚探求」と「感覚回避 (低閾値・能動的行動)」は, 行動反応が能動的という点において軸上の同じ方向にある。このように考えると, 象限間に相関があることは理にかなったことであり, 本チェックリストの各因子は, 該当の象限により強い相関を示し, 該当象限以外にも相関したものと推察される。

「感覚過敏」と「感覚回避」を区別する Dunn のモデルは, 感覚調整障害への対応を考える上で有用である。しかし, 定型発達者を対象とした本研究では, 「感覚過敏」と「感覚回避」に .800 の高い相関が認められた。相関が高い場合は, 内容として両者の共通性が高いことを意味¹¹⁾し, 本チェックリストがモデルとしたこの両者を区別しない Miller LJ の感覚調整障害の分類を支持するような結果であるとも考えられる。

各感覚の検査-再検査間の相関は, $r = .757 \sim .855$ であった。再検査信頼性係数は .70 以上が目安¹²⁾として示されている。下位尺度においても 15 因子中 11 因子においてこの基準を満たしていた。「触覚低反応 (3 項目)」, 「触覚探求 (2 項目)」, 「味覚過敏 (4 項目)」, 「嗅覚過敏 (2 項目)」の 4 因子は, $r = .658 \sim .681$ と若干低い数値であった。尺度に含まれる項目数が増えるほど再信頼性係数が上昇する傾向が報告されており¹³⁾, これらの因子の質問項目が 2~4 項目と少ないことを勘案すると許容範囲の再検査信頼性であると考えられる。

本チェックリストの構成概念妥当性, 判別的妥当性, 内的整合性に加えて, 本研究によ

表3 AASP-Jの象限間の相関

	低登録	感覚探求	感覚過敏	感覚回避
低登録				
感覚探求	.470**			
感覚過敏	.624**	.461**		
感覚回避	.544**	.305**	.800**	

** p<.01

* p<.05

表4 青年・成人用感覚チェックリストの検査—再検査信頼性 (N=55)

各感覚の合計スコア		相関係数
前庭感覚		.825**
固有受容感覚		.828**
触覚		.820**
聴覚		.791**
視覚		.855**
味覚・嗅覚		.757**
因子別スコア		
前庭感覚	過敏	.751**
	前庭探求とバランス	.854**
固有受容感覚	探求	.836**
	力の調整	.782**
触覚	過敏	.821**
	低反応	.681**
	探求	.665**
聴覚	低反応・探求	.822**
	識別	.781**
	過敏	.760**
視覚	識別	.877**
	過敏	.819**
味覚・嗅覚	味覚の低反応・探求	.817**
	味覚過敏	.673**
	嗅覚過敏	.658**

** p<.01

り基準関連妥当性、および再検査信頼性が確認された。本チェックリストでは、感覚別、因子別にスコアを得ることができ、感覚調整障害への支援を行う際に、有用な情報となると考える。

まとめ

定型発達者を対象に「青年・成人用感覚チェックリスト」の基準関連妥当性および再検査信頼性を確認した。

謝辞

調査にご協力くださいました方々に心より感謝申し上げます。

本研究の一部は、日本感覚統合学会の研究助成を得て実施した。

文献

- 1) Gomes E, Pedroso FS, Wagner MB: Auditory hypersensitivity in the autistic spectrum disorder. Pro Fono 20(4): 279-284, 2008.
- 2) ニキリンコ, 藤家寛子: 自閉っ子こういうふうになっています, 22-63, 花風社, 東京, 2004.
- 3) Anita C B, Shelly JL, Elizabeth A M (土田玲子, 小西紀一・監訳): 感覚統合とその実践. 協同医書, 東京, 2006, pp.5-126.
- 4) 太田篤志, 土田玲子, 宮島奈美恵: 感覚発達チェックリスト改訂版 (JSI-R) 標準化に関する研究. 感覚統合障害研究 9: 45-63, 2002.
- 5) 辻井正次, 萩原拓, 岩永竜一郎, 伊藤大幸, 谷伊織: 日本版青年・成人感覚プロフィール ユーザーズマニュアル. 日本文化科学社, 東京, 2015.

- 6) 辻井正次, 萩原拓, 岩永竜一郎, 伊藤大幸, 谷伊織: 日本版感覚プロフィールユーザーズマニュアル. 日本文化科学社, 東京, 2015.
- 7) 立山清美, 清水寿代, 山田孝: 青年・成人前期用感覚チェックリスト作成に関する予備的研究－大学生・専門学校生を対象とした JSI-R (日本版感覚インベントリ－改訂版) の特徴. 日保学誌, 15 (4), 231-239, 2013.
- 8) Miller LJ, Anzalone ME, Lane SJ, Cermak SA, Osten ET: Concept evolution in sensory integration: a proposed nosology for diagnosis. *Am J Occup Ther* 61(2): 135-140, 2007.
- 9) 立山清美, 中岡和代, 石井良和, 山田 孝, 太田篤志: 青年・成人用感覚チェックリストの開発－妥当性と信頼性の検討－. *作業療法*, 37 (5), 518-528, 2018.
- 10) 富田 望, 嶋 大樹, 熊野宏昭: 社交不安症における心的視点尺度の開発. *心身医学*, 58: 65-73, 2018
- 11) 松尾太加志, 中村知靖: 誰も教えてくれなかった因子分析. 北大路書房, 京都, 2002, pp75.
- 12) 高本真寛, 服部 環: 国内の心理尺度作成論文における信頼性係数の利用動向. *心理学評論*, 58, 220-235, 2015.
- 13) 小塩真司: 心理尺度における再検査信頼性係数の評価－「心理学研究」に掲載された文献のメタ分析から－. *心理学 評論*, 59 (1), 68-83, 2016.

Development of the Sensory Modulation Questionnaire for
Adolescents/Adults:
A study of criterion-related validity and test-retest reliability

By

Kiyomi TATEYAMA *¹, Kazuyo NAKAOKA *¹, Yoshikazu ISHII *², Yuko ITO *²

From

*¹Graduate School of Comprehensive Rehabilitation, Osaka Prefecture University

*²Department of Occupational Therapy, Graduate School of Human Health Sciences,
Tokyo Metropolitan University

The purpose of this study was 1) to clarify the criterion-related validity and 2) to examine the test-retest reliability of the Sensory Modulation Questionnaire for Adolescents/Adults. 1) The participants were 108 typically developed people (53 males, 55 females, 35.7 ± 10.9 years old). Spearman's rank correlation coefficient was calculated by using the Japanese version of the Adolescent /Adult Sensory Profile (AASP-J) as an external criterion. As a result, each of the factors of Sensory Modulation Questionnaire for Adolescents/Adults and the corresponding quadrant of AASP-J had moderate correlation 9 factors out of 12 factors, and weak correlation in 3 factors. 2) The participants were 55 typically developed people (35 males, 20 females, 34.6 ± 10.1 years old), and the period of test-retest was 2 weeks. As a result, Spearman's rank correlation coefficient of total score of each sensory processing between test and re-test was $r=0.757 \sim 0.855$. Furthermore, Spearman's rank correlation coefficient of 11 out of 15 subordinate factors were greater than $r=0.75$, and 4 out of 15 subordinate factors were greater than $r=0.65$. Therefore, the criterion-related validity and the test-retest reliability of this Sensory Modulation Questionnaire for Adolescents/Adults were confirmed.